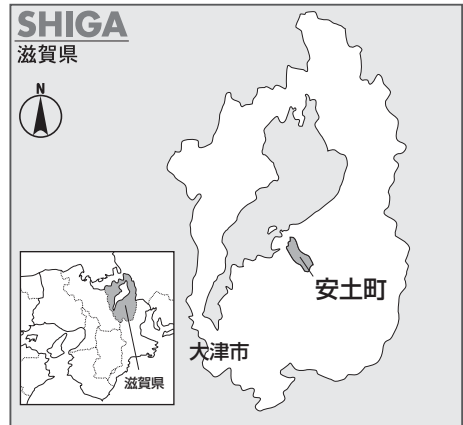


滋賀県

あ づ ち ち ょ う
安土町



国際交流とグリーンツーリズムのモデルタウンを目指す安土町

安土町企画観光課

はじめに

安土町は滋賀県のほぼ中央部に位置し、湖東平野の開けたところにあり、その北西には広大な琵琶湖が控えています。琵琶湖最大の内湖「西の湖」をはじめ、弥生時代の農耕集落「大中の湖南遺跡」や古墳時代の県下最大の前方後円墳「瓢箪山古墳」、万葉のころ数々の詩に詠まれた「老蘇の森」、室町時代の日本最大の山城「観音寺城跡」など、各時代を代表する国の史跡が町内に点在する歴史のまちです。

山と湖の恵みを受けたこのまちは、中世から京都に上る道として湖上・陸上交通の重要な拠点であったため、約四二〇年前には織田信長が天下統一の拠点として「安土城」を築き、国内外の人と物が行き交う国際都市を形成しました。

その時代からの交流が縁となつて、今年二月にはイタリア北部のマントヴァ市と姉妹都市提携を結びました。



↑2005年2月20日、文芸セミナーヨホール(安土町)にて、マントヴァ市(イタリア)と姉妹都市提携の調印式を行いました

歴史を生かした国際文化交流事業

織田信長は、この小さいまちに楽市・楽座

座などの政策を用いて、新しい社会体制をつくり上げました。また、西洋文化に興味を持ち、安土にキリシタン神学校セミナリヨをつくらせるなど、先進的に国際交流を始めました。

当町の国際交流は、約四二〇年前の天正遣欧使節に由来します。織田信長が狩野永徳に命じて描かせた屏風絵「安土城之図」は、ローマ法王に献上されるため、宣教師・ヴァリニャーノと天正遣欧使節に託され、一五八二年に長崎を出航しました。およそ三年の年月をかけて途中三六都市に立ち寄りながら、無事にローマにたどりつき、当時のローマ法王グレゴリオ一三世に謁見しました。

しかし、その屏風絵はその後行方不明となり、いまだ発見されておらず日本史上の謎となっています。現在、探索のために各国政府や関係機関と直接連絡を取り調査を進めています。日本とイタリアの歴史・美術・文化交流とかがわっているため、当町の国際交流の一つの重要な事業に位置づけられています。

また、歴史を生かしたまちづくりの一環として、一九八七年に、天正遣欧使節が旅の途中に立ち寄った各都市と文化交流を推進するために、安土町から関係都市に友好文書を送りました。その結果、ポルトガル一都市、スペイン三都市、イタリア五都市との間で、文化交流提携が調印されました。

さらに、一九九〇年にスペイン・セビリア

で開催された万国博覧会の日本館に安土城の天主(天守閣)が展示されたことをきっかけに、一九九九年にまちに国際文化交流協会が結成され、交流都市との友好をより親密にするために使節団を派遣しました。なお、この時展示された天主は、現在、「安土城天主・信長の館」に移築され、展示されています。

姉妹都市と国際文化交流

イタリア・ロンバルディア州のマントヴァ市はミラノから約一一〇km東に位置し、まちを取り囲むようにミンチョ川が幅を広げ、三つの湖を形づくっています。

マントヴァ市では湖を守るため『アジェンダ21計画』(市民生活や経済活動を変えることにより環境との共生を目指す新たなまちづくりプロジェクト)環境と開発に関する国連会議のプロジェクトを進めています。これは滋賀県で進められている『琵琶湖のマザーレイク21計画』と同様であり、また、安土町民が琵琶湖や「西の湖」を守っている行動と同じです。

水環境の保全はマントヴァ市と安土町との重要な共通点の一つで、クリーン・エネルギー、グリーンツーリズムを推進している当町はマントヴァ市と環境保護ノウハウ・技術知識などの交流も行う計画です。

また、積極的に姉妹都市と交流を推進するために、町国際文化交流協会がいろいろな活動をしています。まず、お互いの市やま

ちの様子で相手に紹介したい景色や建物等の写真を送り合い、相互理解が深められるような写真交流をしています。

また、教育分野では、それぞれの小学校でテーマを決めて絵を交換し合い、お互いの学校で展示する予定です。

その他の町民に対しては、まちのイベントの時、例えば六月に開催される「あづち信長まつり」や一月の「秋まつり」でマントヴァ市の名産品を送ってもらい、試食と併せて食文化相互理解のための活動を行います。また、安土町でイタリアン・ウィークを、マントヴァ市ではジャパン・ウィークを設けるなどして、お互いに展示や文化紹介をする計画です。そして安土町の様子をマントヴァ市民に紹介するために、イタリア語と英語でのビデオ・メールを送る計画です。

町民の国際交流理解の推進

安土町民の国際化を進め、「草の根」のレベルから国際化をするために外国語、とり



↑安土町の国際交流員を中心に、地域の方を対象にイタリア語・英語教室を毎週開催しています

わけイタリア語と英語を重視した国際理解教育を推進しています。また、一般の町民の方を対象に国際理解を深めるために国際サロン

を開催。国際交流員をはじめ近隣に住む外国人から出身地の日常生活、教育制度、歴史、文化などについて話してもらいます。

世界ネットワークの形成

町内で暮らす外国人が安心して暮らせるまちにするために、行政と双方向に情報を得られる英語版の生活情報パンフレットを作成したり、国際文化交流協会と連携して外国人の相談を受け付けたりしています。国際文化のモデルタウンを目指している安土町では、外国人との共生が当たり前に感じられる地域社会の創造に住民とともに努めていきたいと考えています。

そして、外国でも簡単に安土町の歴史・文化・観光スポットについて調べられるようにまちのホームページを英訳し、それによって姉妹都市や友好関係都市に安土町ホームページを載せてもらい、世界的ネットワークの形成を推進しています。



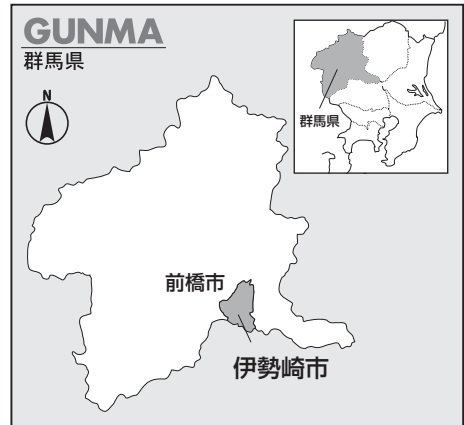
↑安土町の国際交流員や周辺地域の外国の方をゲストに、各国の料理教室を開催しています

これからも、歴史と環境が調和したまちづくりを進め、「グリーンツーリズム」と「国際交流」のモデルタウンを目指して、姉妹都市マントヴァ市をはじめ世界とのネットワークを結ぶ企画をしています。

群馬県

伊勢崎市

今出発『二十万人のまちづくり』
そして、多文化共生のまちづくり



伊勢崎市市民部国際課

伊勢崎市のプロフィール

伊勢崎市は、群馬県南部、関東平野の北西、上毛三山の一つである赤城山麓南面の伸びやかな裾野に位置し、ほぼ平坦地にあります。南部には利根川が流れ、四季折々の自然を感じることできるまちです。冬季は上州名物のからっ風にさらされるもの、一年を通じて比較的温暖で日照時間が長いという特徴を持っています。

その歴史は、豪族の屋敷を模した家形埴輪が出土した茶臼山古墳をはじめとする古墳があり、早くから力のある豪族による組織的な社会が形成されていたことがうかがえます。

古くから火山灰地を利用した桑の栽培による養蚕が盛んで、江戸時代には太織、明治以降には伊勢崎銘仙が全国的に知られ、織物のまちとして発展してきました。

近年は利便性に優れた幹線道路網を活かし、製造業や大規模商業施設の進出が進み、商工業が盛んな産業地域となつています。また、近郊農業も盛んで農産物の生産も多い地域です。

今出発『二十万人のまちづくり』

平成一七年一月一日、伊勢崎市、赤堀町、東村、境町が合併し、新しく人口二〇万の伊勢崎市が誕生しました。新市では、『二十万人のまちづくり』、『安心安全なまちづくり』、『健康医療の元気なまちづくり』を

重点施策として掲げ、取り組んでまいります。また、本市は群馬県下最多の外国人が生活するまちで、六月三〇日現在の登録者数は、六三カ国一万二九六人に上ります（人口比五・九〇％、上位五カ国…ブラジル五一四〇人、ペルー二七二七人、フィリピン二二一〇人、ベトナム七三二人、中国五〇一人）。これは、出入国管理法が改正された平成二年頃から急激に増大し、現在に至っています。かつて上位を占めていた韓国・朝鮮、中国に代わり、南米諸国や東南アジア諸国の人たちが増加しています。

変貌する国際交流

これまで国際交流と言えば、姉妹友好都市提携を結んだアメリカ・ミズーリ州スプリングフィールド市、中国・安徽省馬鞍山市との交流事業を核に据えた市民レベルのさまざまな交流活動を、伊勢崎市国際交流協会が中心に実施してまいりました。学生、市民文化使節団等の派遣及び受入れ、農工業研修生の受入れ、伊勢崎市と両市の節目となる記念式典での交流、また市長をはじめとし、市議会、区長会等行政団体等の交流を進めてまいりました。ま



↑姉妹都市文化使節団

た、海外の衣食住などの文化を紹介する国際交流のつどい、日中交流展、国際映画祭等を実施してまいりました。

今、伊勢崎のまちを歩くとたくさん外国人と出会うことができます。いせさきまつりなどのさまざまな行事においても、たくさん外国人が参加しています。小・中学校においても数多くの外国籍児童生徒が学んでいます。また、まち中では外国レストラン、外国食材販売店、外国衣料販売店、外国版ビデオレンタル店等も目にします。それらの店舗をテナントとして集めたスーパー形式の店舗さえあります。店内に入れば、まさに外国そのものです。

こうした状況の中、伊勢崎市国際交流協会では、私たちと生活を共にする外国籍市民に対して、窓口相談事業、日本語教室、公立学校に通う外国籍児童生徒の絵画展等を実施してまいりました。しかし、増加を続ける外国籍市民に対して、これまでどおりの接し方では対応しきれない場面が増加しています。

市民部国際課の新設

平成一六年度、本市は市民部に国際課を新設しました。国際課は国際化担当と国際交流担当を配置し、伊勢崎市国際交流協会の事務局であるとともに伊勢崎市における国際化に関する総合的な調整を業務の中心とし、外国人相談窓口、国際交流及び海外都市提携に関する業務を行います。

まず、国際課では群馬県で初めてとなる外国籍市民による「外国人共生会議」（委員一三カ国二〇人）を設置しました。



↑外国人共生会議

広く外国籍市民の声を聴き、日本との文化の相違を踏まえた上で、外国籍ではあるけれど伊勢崎市民としての意見を集約し、多文化共生のまちづくりを目指すことを目的としたものです。その成果として、委員の発案による利根川流域クリーン作戦、外国籍市民が多数生活する公営団地の花苗植栽などを、多数の外国籍市民も加わり実施しました。また、一年間の成果を「ルビ運動の推進（ルビ・振り仮名を振るることにより外国籍市民に対して、分かりやすい文章を提供する）」、2. コミュニティセンターの設置（外国籍市民と一般市民がお互いに集うことのできる拠点づくり）、多文化共生の拠点づくり、3. 委員は、伊勢崎市民として積



↑市庁舎内・ルビの振られた課名板

極的に市政にプラスとなる活動を実践する、という三つの提言をまとめました。

さらに庁内の関係部課職員による「国際化推進研究プロジェクトチーム」の充実を図り、外国籍市民に関する施策を検討しました。その結果、公営住宅において家庭ごみの分別と出し方を分かりやすく示した五カ国語表記による看板の設置が実現しました。また、四カ国語表記による外国人登録、国民健康保険、納税などの解説をした外国人生活パンフレットを作成しました。

本年度は、「外国人共生会議」及び「国際化推進研究プロジェクトチーム」を継続してまいります。さらに外国人登録上位二カ国であるブラジル、ペルーの「国別会議」を開催し、今後の国際化を推進するための組織整備を促し、「外国人共生会議」及び「国際化推進研究プロジェクトチーム」との連携に努めていく予定です。

多文化共生のまちづくり

国内外の状況を踏まえると、これからも外国籍市民の増加は続いていくと思われる。以前に比べ、日本人だから、外国人だから、という垣根も低くはなってきていますが、『二十万人のまちづくり』、『安心安全なまちづくり』、『健康医療の元気なまちづくり』を建設する中で、一般市民と外国籍市民、さらに伊勢崎市国際交流協会と協働しながら多文化共生のまちづくりを目指していきたいと思えます。